

風車

紀州の歴史と文化の風

— 創刊第50号記念 —

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌

【かざぐるま】

2010 春号

50

財団法人 和歌山県文化財センター

【特集】

重要文化財

旧中筋家住宅の修理竣工

【連載】

埋蔵文化財課 短信

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

考古学の散歩道

「紀伊の古代寺院」



重要文化財旧中筋家住宅の修理竣工

中筋家の建築

重要文化財旧中筋家住宅は和歌山市の東部郊外、禰宜ねぎに所在する、江戸時代末期の大庄屋の遺構いしこうです。大庄屋時代の屋敷構えが大変良く保存されており、主屋、表門、長屋蔵、北蔵、内蔵、御成門の六棟と土塀が、国の重要文化財に指定されています。中筋家は寛延三年（一七五〇）に和佐組大庄屋となり、代々大庄屋を務めた家でした。そして戦後になって中筋家に代わり、楯本家かじもとが住まいしてきました。文化財を保存管理する必要から、和歌山市が管理団体になり、市によって保存修理されることになったものです。

屋敷は南北五七メートル、東西四〇メートルあり、熊野街道の西側に接して構えられています。敷地の中央東寄りに規模の大きな主屋が建ち、南に長屋門形式の表門、西に長屋蔵、北蔵、北に御成門が構えられ、外周が土塀で囲われます。

敷地内には主屋の周囲に内蔵、茶室、味噌部屋、人力車庫が配されています。

主屋は二十畳敷きの大広間と、三階望楼を備えた大規模な構えの建築で、熊野街道沿いに大庄屋の家としての威厳を放っていました。指定時には明確な建築年は不明でしたが、今回の修理で鬼瓦にへら書きが見つかり、嘉永五年（一八五二）に建設されたことが判明しました。主屋の複雑な屋根は本瓦と棧瓦



屋敷配置図



表門の正面外観
表門は大庄屋役所として使われていたと考えられている

で葺き分けられています。このうち棧瓦は和歌山独特の「丸棧瓦」が用いられていることもわかりました。

保存修理事業

保存修理は平成一二年二月にスタートしました。文化財指定後初めての根本的な修理となり、文化財建造物の全々と、味噌部屋、茶室、人力車庫の修理を行い



主屋大広間を北側から見る
北側には庭園が広がっている

ました。そしておよそ一〇年の歳月を経て、昨年一二月に保存修理工事が完了したのです。

工事の設計監理と発注業務は、和歌山市より和歌山県文化財センターが受託し、工事を進めてきました。また調査を踏まえ、屋敷構えが現状の形態となった明治時代中期の姿に、文化庁の現状変更

許可を受け各所を復原整備しました。

主屋は中庭の縁や東側の縁まわりが、雨漏りと蟻害で大きく破損してしまっていたので、いったん解体し修理しました。屋根は一五〇年余り葺き替えていませんでしたが、今回の修理では全面を葺き替えました。その際、もとの瓦は極力再利用するように努め、およそ半数ほどを再利用して葺いています。各室の床組にも蟻害が見られたため、床も解体し、破損した大引や根太を取り替えました。

文化財建造物の保存修理は「解体修理」が一般的ですが、解体すると、古い土壁は残すことが出来ません。今回の修理は、どの建物も土壁も良好に保存できるように、解体範囲を極力少くした「半解体修理」とした点が特徴です。また畳や襖なども出来るだけ「本物」を保存するように工事を進めました。

特徴的な襖の唐紙文様

主屋にはたくさんのお襖が建て込まれ、ほとんどに唐紙が張られていました。中でも特徴的なのは、賓客を迎えた才オゲンカンや大広間のゴジョウ、三階望楼の階段室などに青い唐草文様が見られたこ

とでした。この文様は「唐花立涌」と言います。唐紙は落ち着いた桐文様が一般的ですが、唐花立涌はなかなか派手な趣きがあります。京都や東京では、現在も伝統的な唐紙が作られてはいます。しかし唐花立涌は見る事が出来ません。幻の唐紙文様なのです。

中筋家の現状の襖の上張りをめぐる



主屋大広間の内部
二十畳敷の広い書院座敷である



半解体修理中の主屋
中央に三階望楼が見える



二階の簞笥に保存されていた唐紙の切れ端
特徴的な唐花立涌文様である



主屋大広間のゴジョウ
右が保存した古い唐紙、中央より左が今回復原製作した唐紙

と、かつて貼られていた唐紙が姿を現しました。唐紙は傷みややすいので何度も貼り直されていますが、襖によつては前に貼られていた唐紙がそのまま残されていたり、断片が残されていたりしました。それを見ると唐花立涌は代々使い続けられ、現状は違っていても、元は唐花立涌であった襖が、相当多かつたことがわかりました。また簞笥の中からは、かつて

の唐紙の切れ端が大量に見つかり、代々の唐花立涌の色合いも判明しました。この特徴的な文様は、実は中筋家だけでなく、貴志家住宅(元湊御殿・和歌山市)や粉河寺本坊(紀の川市)、十禅院庫裏(紀の川市)など、紀州藩に縁のある建造物で見ることが出来ます。中筋家でなぜこの柄にこだわったのかは不明ですが、紀州藩に任命された大庄屋という職柄と無

関係ではなかったのでしょうか。さいごに 文化財の保存修理が昨年一二月に完了し、引き続き外構や展示設備の準備が進められています。そして今年の夏頃から、いよいよ一般公開される予定だそうです。紀ノ川流域随一の大規模民家として、県内外から多くの注目を集めることになりそうです。

(御船達雄)

粉河寺遺跡の発掘調査

粉河寺遺跡は、粉河寺（紀の川市粉河）の境内にほぼ重なって位置しています。今回は、境内を流れる長屋川を改修する工事に先立って発掘調査を行いました。調査地は、粉河寺中門の真南側になります。粉河寺そのものは、粉河観音宗の本山で西国三十三所観音巡礼の第三番札所として、また国宝絹本着色粉河寺縁起を有することで非常に有名なお寺です。

長屋川を改修する工事に先立つ調査は、平成一八年度に引き続いて今回で二回目になります。



写真1

今回の調査では、連続した屋敷地と護岸石積などの生活の跡が幾重にも重なって見つけられ、多くの成果を得



写真2

ることができました。見つかった主な遺構は、鎌倉時代の根固め石を伴った橋脚（写真1）・水の勢いを制御する杭列、鎌倉・室町時代の各遺構面において石積護岸・石組溝、江戸時代の塀基礎（写真2）・石積護岸・石組溝などがあります。調査途中において、南側の丘陵からの湧き水や調査地が長屋川より低くなるに従って川底からの湧き水のため壁面の崩壊にみまわれ、大変苦勞の多い調査になりました。

それでも、調査に伴って多くの遺構・遺物を見つけることができました。大半は、屋敷地側の整地土や昔の長屋川に堆

積した土砂から出土した鎌倉・室町時代の土器類、室町時代から江戸時代にかけての様々な瓦類で占められます。その中で、特に興味をひくものに、数は少ないですが古墳時代の須恵器、平安時代末の土師器・瓦（写真3）、室町〜江戸時代の遺物に混じって溶解炉の破片が数点出土しています。

また、十分な調査ではありませんが、現在の地表面から約4mも下がった昔の長屋川に堆積した土砂の中から平安時代の遺物も出土しました。

以上のことから、代々踏襲されてきた屋敷地の区画割が遺存していることが分かってきました。このように時代ごとに屋敷地と護岸石積の変遷を辿ることができ、より大きな成果と言えます。

（土井孝之）



写真3

紀伊の古代寺院 —川原寺式軒瓦—

富加見 泰彦

連載してきましたコラムの最後は川原寺の瓦について触れることにします。『日本書紀』大化元年(645)『天皇より、伴造に至るまで、造るところの寺、造ること能はずは朕皆助け作らん』と大和の有力氏族や地方の郡司級氏族に氏寺造営の奨励と援助が約束されたことは以前に触れました。この仏教施策によって7世紀後半以降8世紀に至るまで各地に盛んに氏寺(私寺)が建立されるようになったのです。紀伊国でもご多分に洩れず旧伊都郡、旧那賀郡、旧名草郡、旧在田郡、旧牟婁郡において寺院がこの50年余りの間に14ヶ寺も創建されました。持統六年(692)年には全国で545寺が存在したことが記されています。

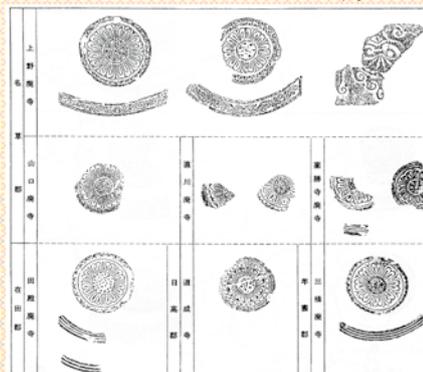
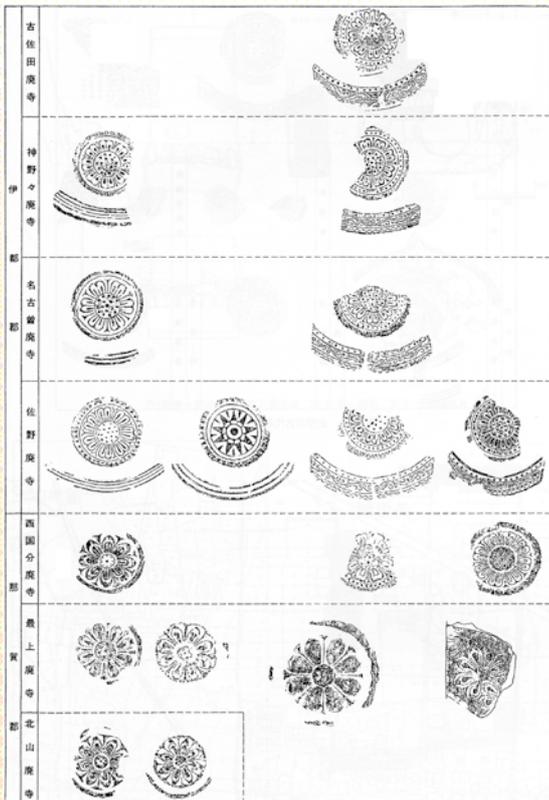
紀伊国は、伊都郡に本薬師寺系、那賀郡に坂田寺系、名草郡に法隆寺西院系と郡単位で瓦がまとまりを見せるという特徴があります。しかし、川原寺系の瓦は、伊都郡では神野々廃寺、名古曾廃寺、佐野廃寺、名草郡では薬勝寺廃寺、在田郡では田殿廃寺、日高郡では道成寺、牟婁郡では三栖廃寺と郡域を超えて広範囲な広がりを見せます。このことは何を意味しているのでしょうか。皇位継承を巡った古代最大の内乱といわれる壬申の乱から考えてみることにします。川原寺系の瓦は壬申の乱で勝利した大海人皇子側(後の天武天皇)に味方した氏族の分布と重なるという重要な指摘があります。信憑性はともかくとして「日本書紀」や「続日本紀」にこの壬申の乱に組みした紀伊国に関係する人物を見ることができます。

- ① 日本書紀甲寅(天武八年二月三日)、紀臣堅麻呂卒、以壬申年之功、贈大錦上位
- ② 日本書紀壬申紀 壬辰、將軍吹負屯干乃樂山上。時荒田尾直赤麻呂啓將軍曰、古京是本宮処也。宜固守。將軍從之。則遣赤麻呂・忌部首子人、令戍古京。於是赤麻呂等詣古京、而解取道路橋板、作盾、堅於京辺衝以守之。
- ③ 続日本紀大宝元年 〇癸卯、正五位上忌部宿禰色布知卒。詔贈從四位上。以壬申年功也。

これらの人物の出自は明らかではありませんが、紀臣、忌部を名乗っている以上、紀伊国縁の氏族と考えられます。紀伊国の川原寺系の瓦を葺いた寺院を建立したのが壬申の乱で論功が

あった氏族だということが証明されれば、地域の歴史がまた一つ解き明かされたことになります。皆さんはどう思われますか。

戦前の国定教科書には、「即位した弘文天皇に対して、大海人皇子が挙兵して勝利したので、謀反人が皇位をついだことになる。これは教育上、有害無益の教材であるから、除いた方がいい」との理由から記載されていませんでした。特定の価値観から歴史を教育する道具として歪曲や隠ぺいは決して許されるべきものでないのは明らかなことです。



建築彫刻の話 ⑧

今年寅年、そこで、干支にちなんだ彫刻を紹介しましょう。高野山に寛永十八年（一六四一）に建てられた「徳川家霊台」という建物があります。全く同じ大きさの建物が二棟並んで建っています。向かって右側の建物は徳川家康を、左側の建物は二代将軍の秀忠をお祀りしています。これは、高野山が徳川幕府に忠誠を誓う証として建てたもので、規模こそ決して大きくはありませんが、彫刻で飾られ、特に内部は彩色、漆、時絵、飾り金具で驚くほど豪華な造りとなっています。二棟の建物には少しだけ違いがあります。一つは向かって右側の建物の前に石の鳥居のあることで、これは家康が「東照大権現」つまり「神」として祀られたことに由来していると思われれます。秀忠は「台徳院殿興蓮社徳誉入西大居士」という戒名で浄土宗の芝増上寺に葬られました。

もう一つの違いは正面向拝の墓股彫刻です。右側の建物は墓股の中に「虎」が彫刻されています。左側の建物では「兎」になっていきます。それは家康と秀忠の生まれ年の干支にちなんだものに違いありません。そして「虎」の墓股の左右には麒麟が彫刻されています。麒麟は「仁」の心を持つ君主が生まれる時に姿を現す霊獣とされていて、まさに神君家康公の誕生を寿ぐ造形ではないでしょうか。秀忠を象徴する「兎」の左右には虎が彫刻されています。兎（秀忠）は虎（家康）に見守られているのです。（鳴海祥博）



写真1 家康霊屋の墓股彫刻「虎と麒麟」



写真2 秀忠霊屋の墓股彫刻「兎と虎」

発掘屋余話 ⑧

龍馬と水中考古学

考古学というと土を相手の仕事とばかりと思われがちですが、水も相手にすることがあります。水中考古学。文字通り湖底や海底での発掘調査です。欧米での歴史は古く、古代ギリシアや大航海時代の沈没船から数多くの文化財を発見しています。

日本では昭和五七年、琵琶湖の湖底遺跡を対象にはじめて本格的な水中考古学が試みられました。筆者もその年のひと夏、下働きとして参加しましたが試行錯誤の毎日でした。

爾来三〇年近く、いくつかの大きな成果が上がっています。そのうちの一つは、鎌倉時代、蒙古襲来の折に元軍が上陸し、激戦地となった鷹島（長崎県）の沖合での調査。この調査では元軍の船の巨大な錨や「てつほう」の玉などが数多く見つかりました。先年この地を訪れ、それらの遺品を見る機会を得ましたが、歴史であった「元寇」を現実として体感することができました。

最近では、坂本龍馬が海援隊の船として使っていた「いろは丸」の調査があります。この船は、一八六七年（慶應三年）、瀬戸内海で明光丸という船と衝突し、福山市の鞆の浦の沖合で浸水沈没したものです。龍馬はこの船には最新式のミニエー銃四〇〇丁など高価なものが積まれていたと主張し、海事法を盾に莫大な損害補償を要求しました。しかし調査の結果、この船がいろは丸であることがほぼ確定できたにもかかわらず、見つかったのは船室のドアノブなど内装品や刀の柄などに用いられた鮫皮といったもので、ミニエー銃は見つかっていません。もしかすれば龍馬一流のハツタリであったかもしれないね。ちなみにそのハツタリに屈して十両近く補償金を分捕られたのは、わが紀州藩でした。

（村田 弘）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>
鋭意企画中

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「新発見・新指定の文化財」

期 間：平成 22 年 3 月 6 日～4 月 18 日（日）

内 容：博物館では県内外での文化財調査を行って、和歌山の歴史を物語る資料の発見や評価に努めています。その成果の一部は県指定文化財への指定という形で反映されています。新発見・新指定された多くの文化財を公開し、和歌山の新たな魅力をお伝えします。

現場事務所一覧

◎金剛三昧院保存修理事務所

高野町高野山 425

TEL 0736-56-5578

【埋蔵文化財課分室】

和歌山市新在家 61 番地 -4

TEL 073-472-3710

『風車』はお陰様をもちまして、創刊 50 号となりました。皆様のご支援、ご愛読に深くお礼申し上げます。

目次

- 1 表紙 旧中筋家住宅主屋
- 2 特集 重要文化財旧中筋家住宅の修理竣工
- 5 埋蔵文化財課 短信
- 6 連載コラム 考古学の散歩道
「紀伊の古代寺院」
- 7 きのくに歴史小話
「建築彫刻の話」
- 8 催し物案内
「発掘屋余話」

風車 50 (2010 春号)

平成 22 年 3 月 30 日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>